

FRENCH MEDIUM TANK SOMUA S35

フランス中戦車 ソミュア S35

解説: 斎木 伸生

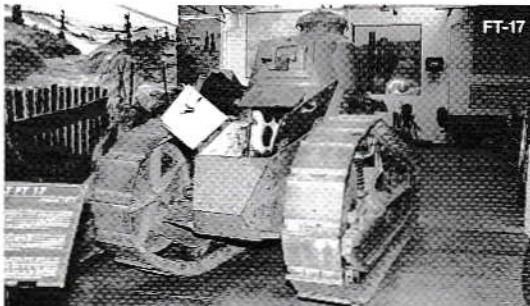


■フランス戦車の歴史

戦車はおよそ100年前、第一次世界大戦の堑壕戦を打開する新兵器として開発されました。世界最初の戦車としては、一般にイギリスが開発した菱形戦車がよく知られていますが、実際には世界各国とも戦車に類する兵器の開発は進められており、特にフランスではイギリスとほとんど同時に戦車の開発、実戦投入を行っていました。シュナイダー突撃戦車やサン・シャモン突撃戦車がそれで、これらは菱形戦車同様の、陸上戦艦ともいるべき鉄製の巨獣でした。

しかし、いっぽうでフランスでは、画期的な戦車が開発されることになります。それがルノーFT-17と名付けられた軽戦車でした。当初は突撃戦車の補助用に開発されたこの戦車は、良好な走行性能と旋回性に加え、軽量小型で大量生産に向いていました。そして、この戦車は全周旋回式砲塔に機関銃を装備しており、これまでの車輌よりはるかに運用の柔軟性が高かったのです。このため一転して、フランス軍では戦車部隊の主力として使用される結果となりました。

ルノーFTは第一次世界大戦中に、当時としては破格の大規模生産が行われ、さらに戦後はアメリカ、オランダ、ベルギー、フィンランド、日本その他世界各国に輸出されるとともに、そのコピーや発展型が製作されたのです。こうして、箱型の車体の左右に走行装置を配し、車体上に全周旋回砲塔を搭載したルノーFTの基本デザインは、まさに世界の戦車のひな型になったのです。



しかし、皮肉なことに傑作戦車ルノーFTを生み出したフランスでは、逆にその巨大な遺産ゆえに新型戦車の開発は停滞することになります。戦後ようやくフランス軍で新たな戦車の開発方針が策定されたのは、なんと1926年のことでした。これに基づき歩兵支援用の中戦車が開発されましたか、少数生産に止りました。フランス軍でようやく第一次世界大戦型を脱した新型戦車の開発が本格化するのは、1930年代に入ってからのことでした。

ここまで歴史でフランス軍では、戦車は基本的に歩兵を支援する兵器として発達してきました。いっぽう陸軍の中でもうひとつ戦車に関係しうる兵科、騎兵部隊の戦車への関心はあまり高くありませんでした。しかし、もはや「馬」の騎兵の時代ではありません。彼らも「鉄の馬」に乗り換えることになりました。1931年、騎兵部隊は機械化の検討を開始し、1932年1月には騎兵総監部によって、騎兵部隊向けの装甲車輌の調達計画が開始されたのです（後述のAMDは1931年12月）。

このとき開発されることになったのは、装輪式の偵察車輌であるAMD（Automitrailleuse de Decouverte：搜索装甲車）、装軌式で近距離偵察用のAMR（Automitrailleuse de Reconnaissance：偵察装甲車）、そして同じく装軌式で戦闘用のAMC（Automitrailleuse de Combat：戦闘装甲車）でした。ずいぶん奇妙な名前ですが、これはあくまで戦車ではないという建前で、騎兵科の管轄で開発するための便法でした。

その中でもAMCはAMRよりも少し重装甲、重武装の車輌で、他の騎兵用戦闘車輌を支援して、敵の装甲車輌と渡り合うことができました。この仕様は1934年6月に改定されましたか、これは敵戦車と渡り合うには、もう少し強力な武装が必要と考えられたからでした。それによればAMCは、戦闘重量13トン、武装は25mmもしくは47mmカノン砲、装甲厚は40mm程度、乗員3名、路上最大速度は30km/hで、航続距離は200kmと定められました。

■ソミュアS35の開発

初めてAMCとして開発されたのは、1933年に生産が開始されたAMR33から発展したルノーAMC34でしたが、この車輌は元がAMRであり、あまりに小型で非力な車輌でし

た。このため軍はすでに、仕様の改定に先立ち1934年5月17日には、フランス初の戦車を製造したシュナイダー社の子会社であるソミュア社との接触を開始していました。

ソミュア社では開発を急ぎ、同年11月には正式契約のないまま試作車体の製作が開始されました。AC3と呼ばれた砲塔のない試作車は早くも1935年4月には完成しました。AC3は砲塔の代わりにダミーウェイトを搭載して、7月から8月にかけて各種の試験が行われました。さらに10月から12月にかけては、実際に部隊での試験が行われました。

試作車輛は1936年3月には改修のため工場に戻されますが、このとき砲塔としてルノーB1と同じ、鋳造で短砲身の47mm戦車砲SA34を装備したAPX1砲塔が搭載されました。なおAPXとはこの砲塔がピュートー工廠(Atelier de Construction de Puteaux)製であることを意味します。さらに増加試作型として、改良が施されたAC4が4輌製作されました。試験結果は良好で、3月25日、軍は騎兵部隊向けの標準装備として、最初の生産ロット50輌を発注しました。軍の制式名称はシャール1935Sですが、一般的にはソミュアS35と呼ばれることになります。

ソミュアS35は計画では3個軽機械化師団への配備と予備を含めて、600輌生産することが予定されました。しかし、本車はコスト高であり財政的理由から、その数は300輌(第二次発注として250輌)に減らされました。その後、戦争勃発前に第三次として200輌が発注されました。が、結局1940年5月までに完成したのは400輌で、さらにフランス降伏までに34輌が完成したといわれています(数字については異説あり)。

ソミュアS35は、当時の他のフランス戦車と同様に、車体と砲塔に、広く鋳造を導入していたことが最大の特徴といえるでしょう。特に車体下部までが鋳造となっており、車体下部は左右、上部は前後に分割された車体パーツがそれぞれボルト止めされていました。基本装甲は40mm、さらに砲塔最厚部は56mmもありました。避弾経始の良好な丸みを帯びた形状のおかげもあって、当時としては非常に強靭な装甲防御力を有していました。

砲塔は当初、ルノーB1に使用されたAPX1砲塔が採用されましたが、砲塔リング径がわずかに拡大されたAPX1CE砲塔に変更されました。主砲には47mm戦車砲SA35が搭載されました。同砲は距離400mで35mmの装甲貫徹力を持ち、当時のドイツ戦車の装甲を実際的な交戦距離で容易に貫徹することができました。副武装として主砲と同軸に機関銃が装備されていましたが、この機関銃は独立して限定旋回することもできました。

足周りは2輪をペアにして、さらに2組を水平リーフスプリングに取り付けて緩衝する形式となっていました。転輪は片側9個で、最後部の転輪は、独立して懸架されました。また当時のフランス戦車に共通して、足周りを覆う防護装甲板が取り付けられていました。エンジンにはソミュアV8気筒ガソリンエンジン(出力190馬力)が装備されており、最大速度は40.7km/hを発揮することができました。乗員は3名で、前部に操縦手と無線手兼副操縦手、砲塔内に車長兼砲手が位置していました。

■ソミュアS35の戦歴

フランス軍では、戦車を装備する機甲部隊を、軽機械化師団と戦車師団の2本立てで編成していました。このうちの軽機械化師団は騎兵師団から発展したもので、騎兵戦車であるソミュアS35は主にこちらの部隊に配備されました。名前を挙げれば、第1軽機械化師団の第1軽機械化旅団第4



胸甲騎兵連隊(第4戦車連隊)、第18竜騎兵連隊、第2軽機械化師団の第3軽機械化旅団第13、第29竜騎兵連隊、第3軽機械化師団の第5軽機械化旅団第1、第2胸甲騎兵連隊といったところでした。定数上の配備数は竜騎兵連隊、胸甲騎兵連隊ともに各48輌となっていました。

このうちの第2、第3軽機械化師団はベルギーに進出し、第二次大戦の大規模な戦車戦として有名な1940年5月12日～14日のジャンブルー・ギャップ(ディール川とムーズ川に挟まれた、ジャンブルー周辺の平原)の戦いで、ドイツ軍の第3、第4機甲師団を迎撃したことで知られています。このときソミュアS35の47mm砲はドイツ戦車に対して十分以上の威力があり、命中弾を受けたドイツ戦車は、簡単に擋座して燃え上がったといわれています。

いっぽう第1軽機械化師団は、オランダを救援するためはるか北へと機動し、5月17日にドイツ軍第5機甲師団と激戦を演じたことが伝えられています。そしてその一部は、ロンメル将軍を震撼させたイギリス軍の反撃、アラスの戦いにも加わったのです。この戦いではイギリス軍のマチルダ戦車の活躍が有名ですが、彼らもドイツ軍の第25戦車連隊と戦い、ドイツ戦車の撃破に貢献したのです。

またもうひとつ、ソミュアS35を配備した部隊に第3胸甲騎兵連隊がありました。この連隊はドイツ軍の侵攻を前に急ぎ編成された、ド・ゴーク大佐の第4戦車師団に配属され、5月19日のクレシーへの攻撃に加わったのです。このとき第3胸甲騎兵連隊の2個大隊のソミュアS35は、攻撃の左翼に展開して、ジュリ、そしてブリニ＝シュル＝セルへと進撃しました。この攻撃は戦争の大勢そのものを変えることはできませんでしたが、ドイツ軍の心胆を寒からしめたのです。

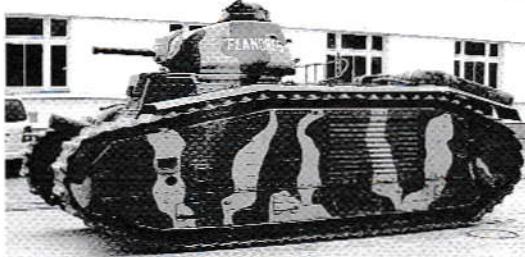
フランス降伏後、残存するソミュアS35は約300輌がドイツ軍に捕獲され使用されました。ドイツ軍では本車はフランス戦車の中で唯一、大規模な改良を施すことなく使用できる戦車と評価されました。ソミュアS35を装備して戦ったことで知られる部隊のひとつが、第211戦車大隊でしょう。同大隊は1941年6月からのバルバロッサ作戦に合わせて、東カレリアに侵攻する部隊を支援するためフィンランドに派遣されました。

また一部のソミュアS35は、ヴィシー政権下のフランス軍部隊でも使用が続けられました。特に1941年9月1日には、独立第12アフリカ猟兵集団が編成され、フランス領西アフリカに派遣されました。その後フランス領西アフリカが連合軍側に立つと、彼らは連合軍とともにドイツ軍に戦うことになります。さらにフランス解放後、フランス軍機甲部隊が再建されますが、1944年10月7日に編成された第13竜騎兵連隊には17輌のソミュアS35が含まれていたのです。ソミュアS35は第二次大戦初期のヨーロッパで最優秀な戦車の一つとして歴史に名を残しています。

■ソミュアS35諸元

- 全長：5,380mm、●全幅：2,120mm、●全高：2,624mm
- 戦闘重量：19.5トン、●乗員：3名
- エンジン：ソミュアV型8気筒液冷ガソリンエンジン
- 出力：190馬力/2,000回転、●最大速度：40.7km/h
- 航続距離：230km(路上)
- 武装：47mm SA35戦車砲×1、7.5mm Reibel機関銃×1
- 弾薬搭載数：120発
- 装甲厚：前面40mm、側面40mm、上面15mm、下面15mm

B1 bis



■The Tank in WWI and Interwar France

The advent of the tank nearly 100 years ago as a potential solution to the gridlock of trench warfare, bestowed upon militaries a new weapon which is still used today. Among the very first "land ships" were French-designed tanks such as the Schneider and Saint-Chamond, developed at the same time as British rhomboid counterparts. However, they were soon outstripped by the subsequent French Renault FT tank, with armed and fully rotating turret, a design so successful that it was exported to numerous other countries after WWI and essentially defined the standard tank layout still in use today. It could perhaps even be argued that the design was too successful, as the French army did not see the need to develop any serious alternative until the 1930s.

Between 1931 and 1932, French specifications were released which effectively ended the monopoly on tanks as infantry support, calling for Automitrailleuse de Combat vehicles (lit. 'armored combat vehicle' - AMC) that would be used in cavalry divisions. At the same time, they also demanded armored cars and tracked vehicles for reconnaissance (AMD and AMR). In June 1934, updated specifications called for AMC's, which were 13t in weight, with 40mm of armor, capable of 30km/h and having a range of 200km. They were to be crewed by three men and equipped with a 25mm or 47mm main gun.

■Development of the SOMUA S35

Original AMC designs based upon lighter AMR vehicles proved largely ineffective. Against this backdrop, Schneider subsidiary SOMUA was tasked with the development of such an AMC, and in March 1936 their AC4 prototype with 47mm SA34 gun was selected for deployment with cavalry units. It was named the Char 1935 S, or SOMUA S35, referring to the year of the first prototype AC3. An initial order of fifty tanks was made, anticipated to rise to 600, but production eventually stopped at 434 (estimates vary) by the time of the French surrender in June 1940.

The SOMUA S35's hull was comprised by four bolt-joined sections, and like the turret made extensive use of cast metal. Its rounded armor, 40mm on the hull and 56mm at its thickest on the turret, made it a fearsome foe. Offensively, the APX1CE turret was fitted with a 47mm SA35 gun that could penetrate 35mm of armor at 400m, more than sufficient to knock out German tanks of the day. A coaxial machine gun with limited independent movement gave back-up fire. Suspension was provided by four leaf-sprung bogies on each side, plus an independently-suspended rearmost ninth wheel, all of which were protected by armored

plates. It housed a crew of three – driver and radio operator in the front, and commander-gunner in the turret – and the 190hp SOMUA 8-cylinder gasoline engine propelled the tank at up to 40.7km/h.

■The SOMUA S35 in Action

French tanks were supplied to armored divisions and the light mechanized divisions which succeeded cavalry units; the SOMUA S35, a cavalry tank, was thus largely integrated into the latter. Dragoon and Cuirassier regiments were assigned 48 per unit.

While the SOMUA S35 only saw action for a limited time before the fall of France, it proved its worth a number of times including with the 2nd and 3rd Light Mechanized Divisions in the Battle of Gembloux, Belgium from May 12 to 14, 1940; the 47mm gun repeatedly tore through opposing German tanks. SOMUA S35s of the 1st Light Mechanized Division clashed with the German 5th Panzer Division on May 17th before providing similarly staunch support for British Matildas in the Battle of Arras on May 21. On May 19 SOMUA S35s were also a part of the 3rd Cuirassier Regiment of De Gaulle's 4th Armored Division which attacked at Créchy.

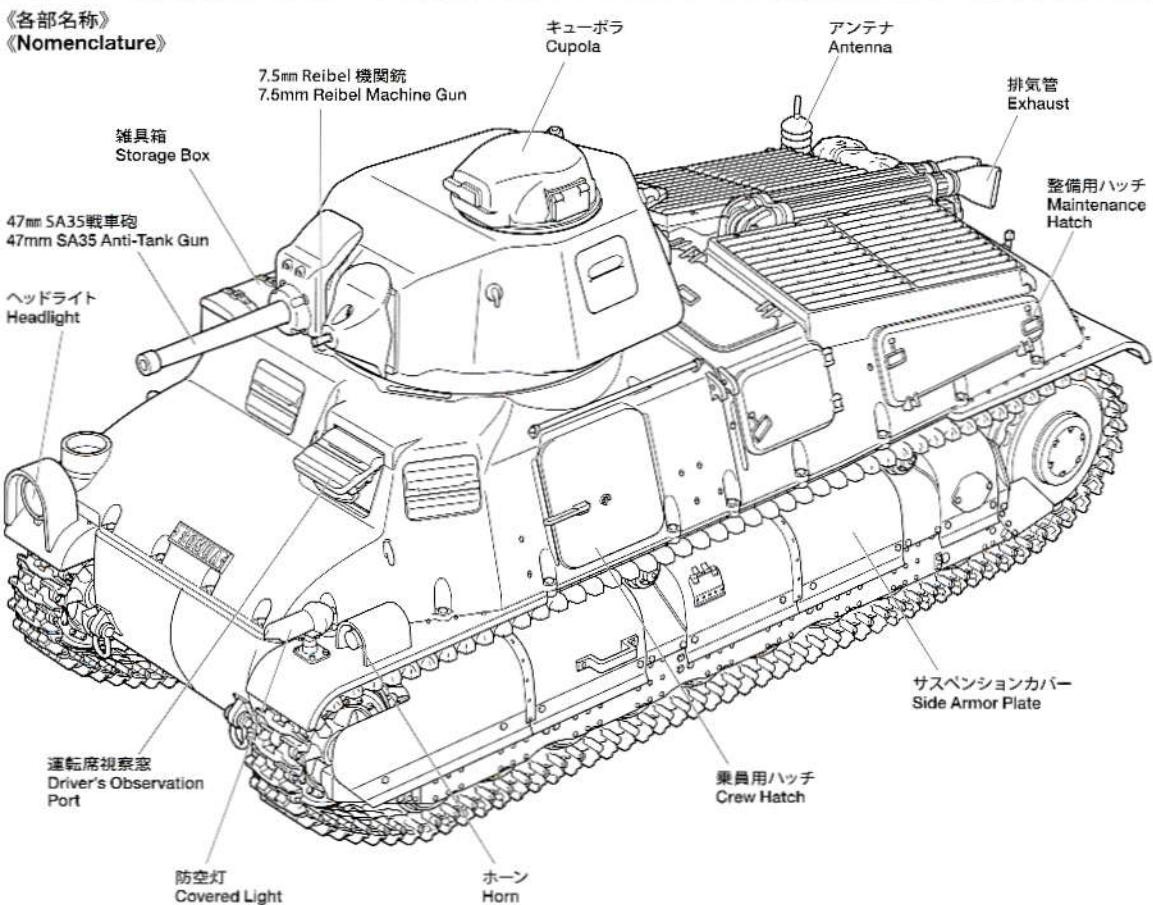
In fact, German forces also rated the SOMUA S35 highly as they continued to use 300 captured examples - without major modifications - following the fall of France, the tank even joining Operation Barbarossa as a part of the German 221st Panzer Battalion. They were also a constituent part of some Vichy French units in West Africa. Finally, some were still used as late as October 1944, when they were integrated into the 13th Dragoon Regiment after the liberation of France, a testament to the effectiveness of its design.

■SOMUA S35 Specifications

- Length: 5,380mm ● Width: 2,120mm ● Height: 2,624mm
- Fully-Loaded Weight: 19.5 tons ● Crew: 3
- Engine: SOMUA V8 liquid cooled gasoline engine
- Maximum Output: 190hp (at 2,000rpm)
- Maximum Speed: 40.7km/h
- Range: 230km (road surfaces)
- Armament: 47mm SA35 anti-tank gun x1 (120 rounds), 7.5mm Reibel machine gun x1
- Hull Armor: 40mm (front, sides), 15mm (upper & lower horizontal plates)

《各部名称》

《Nomenclature》



■ Der Panzer im I. Weltkrieg und in Frankreich zwischen den Kriegen
Das Auftauchen der Panzer vor etwa 100 Jahren als eine der Lösungen das statische Gefecht der Grabenkämpfe zu durchbrechen bot den Armeen eine neue Waffe, welche bis heute genutzt wird. Unter den ersten „Landschiffen“, befanden sich die in Frankreich entwickelten Schneider und Saint-Chamond, welche zur gleichen Zeit auftauchten, wie die rhombenförmigen Britischen Panzer. Diese wurden bald übertragen vom französischen Nachfolgemodell, dem Renault FT Panzer mit seinem gepanzerten Drehturn.

Dieses erfolgreiche Design wurde nach dem I. Weltkrieg in viele Länder exportiert und wurde zum Standard des Panzerdesigns, der bis heute genutzt wird. Man könnte sogar sagen, dass das Konzept zu erfolgreich war, da es die französische Armee bis in die 30er Jahre nicht für nötig hielt eine ernsthafte Alternative zu entwickeln.

Zwischen 1931 und 1932 gab es eine französische Ausschreibung welche das „Panzermonopoly“, zur Unterstützung der Infanterie benötigte. Gebraucht wurden auch Kampffahrzeuge mit Maschinengewehr zur Nutzung bei den Kavalleriedivisionen. Zur gleichen Zeit entstand der Bedarf für gepanzerte Fahrzeuge und Kettenfahrzeuge zur Aufklärung (AMD und AMR). Im Juni 1934 wurden die Forderungen genauer gefasst und man wünschte ein Kampffahrzeug mit 13 Tonnen, 40mm Panzerung, 30 km/h Höchstgeschwindigkeit und einem Fahrbericht von 200 km. Das Fahrzeug sollte eine dreiköpfige Besatzung haben und eine Kanone mit 25 oder 47mm haben.

■ Entwicklung des SOMUA S35

Die Entwürfe des neuen Fahrzeugs basierten auf den leichteren AMR Fahrzeugen, welche sich als unbrauchbar herausgestellt hatte. Trotz dieser Nachteile wurde die Firma SOMUA, eine Tochter der Firma Schneider, beauftragt ein solches Kampffahrzeug zu entwickeln und im März 1936 wurde der AC4 Entwurf mit der 47mm SA34 Kanone für die Kavallerie Einheiten ausgewählt. Der Name war Panzer 1935 S oder SOMUA S35 nach dem Jahrgang des ersten Prototyps AC3. Ein erster Auftrag von 50 Panzern wurde erteilt, mit der Option auf 600. Die Produktion stoppte bei 434 (unterschiedliche Quellenangaben) im Juni 1940 bei der französischen Kapitulation.

Die Wanne des SOMUA S35 wurde durch vier verbolzte Teile dargestellt und wie beim Turm wurde stark auf Gussteile zurückgegriffen. Seine abgerundete Panzerung mit 40mm an der Wanne und 56mm an der dicksten Stelle des Turmes machte ihn zu einem gefürchteten Gegner. Dazu war die Bewaffnung des APX1CE Turmes mit der 47mm SA35 Kanone, die 35mm Panzerung auf 400m durchdringen konnte, mehr als ausreichend um deutsche Panzer zu dieser Zeit zu zerstören. Ein coaxiales Maschinengewehr mit eingeschränkter unabhän-

■ Le Char Français de la 1^{re} G.M. et de l'Entre-Deux-Guerres
L'arrivée du char de combat il y a presque 100 ans, conçu pour mettre un terme à la situation figée de la guerre de tranchées, a fourni aux militaires une nouvelle arme toujours employée de nos jours. Parmi ces premiers "navires terrestres", il y avait des chars de conception française, tels les Schneider et Saint-Chamond développés en même temps que leurs équivalents britanniques de forme rhomboïde. Cependant, tous furent rapidement surclassés par le révolutionnaire tank français Renault FT dont l'armement était installé dans une tourelle pivotant sur 360 degrés. Cet engin très réussi fut exporté dans de nombreux pays après la 1^{re} G.M. et sa configuration est encore celle des chars de combat modernes. On pourrait même affirmer que le FT-17 était trop réussi, puisque l'armée française ne ressentit pas le besoin de développer d'autres alternatives sérieuses avant les années 1930.

Entre 1931 et 1932, les autorités militaires françaises établirent des directives qui mettaient fin au monopole des tanks pour le soutien de l'infanterie. Elles leur préféraient des "Automitrailleuses de Combat" (AMC) qui équiperaient les divisions de cavalerie. En même temps, elles demandaient des voitures blindées et des véhicules chemillés pour les missions de reconnaissance (AMD et AMR). En juin 1934, de nouvelles spécifications furent émises pour des AMC d'un poids de 13 tonnes avec un blindage de 40mm pouvant atteindre 30km/h et avec une autonomie de 200km. Elles devaient être servies par trois hommes et armées d'un canon de 25mm ou 47mm.

■ Développement du SOMUA S35

Les premiers projets d'AMC basés sur des véhicules AMR plus légers furent des échecs. Pour y remédier, la filiale de Schneider SOMUA fut chargée du développement d'un AMC et en mars 1934, son prototype AC4 équipé d'un canon SA34 de 47mm fut retenu pour équiper les unités de cavalerie. Il fut désigné Char 1935 S, ou SOMUA S35, en référence à l'année de sortie du premier prototype AC3. Une commande initiale de 50 tanks fut passée, prévue pour passer à 600, mais la production s'arrêta au 434^{me} exemplaire (ce chiffre varie) au moment de la capitulation française en juin 1940.

La caisse du SOMUA S35 était constituée de quatre sections assemblées par des boulons, et comme la tourelle, était principalement en métal moulé. Son blindage arrondi, de 40mm à l'avant et 56mm au point les plus épais de la tourelle, en faisait un adversaire redoutable. Côté offensif, la tourelle APX1CE était équipée d'un canon SA35 de 47mm qui pouvait pénétrer 35mm de blindage à 400m, plus que nécessaire pour mettre hors de combat les chars allemands de l'époque. Une mitrailleuse coaxiale au débattement limité fournissait la puissance de feu auxiliaire. La suspension était assurée par quatre bogies montés

giger Richtbarkeit gab zusätzliche Feuerkraft. Die Radaufhängung bestand aus 4 blattgefedernten Laufrollenwagen an jeder Seite mit einer 9ten Laufrolle am Ende, die separat gefedert war. Alle zusammen wurden durch Panzerplatten geschützt. Die Besatzung bestand aus drei Mann: Ein Fahrer und ein Funker in der Wanne und der Kommandant, der gleichzeitig Schütze war im Turm. Der SOMUA 8-Zylinder Benzinmotor mit seinen 190hp beschleunigte den Panzer auf 40,7 km/h.

■ Der SOMUA S35 im Einsatz

Die französischen Panzer wurden in den gepanzerten Divisionen und in den leichten mechanisierten Divisionen eingesetzt, die die Nachfolge der Kavallerieeinheiten antraten. Der SOMUA, eine Entwicklung der Kavallerie wurde dort auch stark eingesetzt. Die Dragoner- und Kürassierregimenter erhielten 48 Panzer pro Regiment. Obwohl der S35 nur kurz bis zur Kapitulation Frankreichs eingesetzt wurde bewies er seine Stärke häufig, wie z.B. in der Schlacht bei Gembloux in Belgien bei der 2. und 3. leichten mechanisierten Division vom 12 bis zum 14 Mai 1940. Die 47mm Kanone zerstörte wiederholt deutsche angreifende Panzer. Die SOMUA S35 der 1. leichten mechanisierten Division kämpften mit der deutschen 5. Panzerdivision am 17 Mai bevor sie die britischen Matildas in der Schlacht von Arras am 21 Mai unterstützten. Am 19 Mai waren 19 SOMUA S35 beim 3. Kürassierregiment von De Gaulles 4. gepanzerte Division beim Angriff auf Créchy.

Die deutsche Wehrmacht schätzte die SOMUA S35 sehr hoch ein und nutzte nach der Kapitulation Frankreichs 300 erbeutete Panzer, ohne große Modifikationen, sogar bei der Operation Barbarossa als Teil des 221. Panzerbataillons. Sie waren auch ein wichtiger Teil der Einheiten des Vichy Frankreich in Nordafrika. Schließlich wurden einige im Oktober 1944 nach der Befreiung Frankreichs genutzt als Bestandteil des 13. Dragonerregiments; ein weiterer Beweis für den Wert dieser Entwicklung.

■ SOMUA S35 technische Daten

- Länge: 5,380mm ● Breite: 2,120mm ● Höhe: 2,624mm
- Gefechtsgewicht: 19.5 tons ● Besatzung: 3
- Motor: SOMUA V8 flüssigkeitsgekühlter Benzinmotor
- Maximale Leistung: 190hp (bei 2,000 U/min)
- Höchstgeschwindigkeit: 40.7km/h
- Fahrbereich: 230km (auf Strasse)
- Bewaffnung: 47mm SA35 Panzerabwehrkanone x1 (120 Schuss), 7.5mm Reibel Maschinengewehr x1
- Panzerung der Wanne: 40mm (vorne, seitlich), 15mm (obere und untere horizontale Platten)

sur ressorts à lames de chaque côté, plus une neuvième roue arrière suspendue indépendamment, tous protégés par des plaques blindées. L'équipage comprenait un conducteur et un opérateur radio à l'avant et le chef de bord dans la tourelle. Le moteur SOMUA 8 cylindres de 190cv permettait au char d'atteindre 40,7km/h.

■ Le S35 en Action

Les tanks français étaient déployés dans les divisions blindées et les divisions légères mécaniques qui succéderont aux unités de cavalerie ; le SOMUA S35, char de cavalerie fut donc largement versé dans ces dernières. Les régiments de Dragons et Cuirassiers en reçurent 48 exemplaires chacun.

Même si le SOMUA S35 ne fut employé que peu de temps au combat avant la défaite de la France, il prouva sa valeur à de nombreuses occasions, en particulier avec les 2^{me} et 3^{me} Divisions Légères Mécaniques lors de la Bataille de Gembloux, Belgique du 12 au 14 mai 1940 ; le canon de 47mm percant à de nombreuses reprises les tanks allemands. Les SOMUA S35 de la 1^{re} Division Légère Mécanique affrontèrent la 5^{me} Panzer Division allemande le 17 mai avant d'appuyer les Matilda britanniques lors de la Bataille d'Arras le 21 mai. Le 19 mai, des SOMUA S35 faisaient partie du 3^{me} Régiment de Cuirassiers de la 4^{me} Division Blindée du Colonel De Gaulle qui attaqua Créchy.

De fait, les allemands considéraient le SOMUA S35 très efficace et ils continuèrent à utiliser les 300 exemplaires capturés – sans modification majeure – après la défaite de la France. Certains participèrent même à l'Opération Barbarossa dans le 221^{me} Bataillon de Panzers. Des S35 équipaient également des unités françaises de Vichy en Afrique de l'Ouest. Enfin, certains furent utilisés encore plus tardivement, jusqu'octobre 1944, intégrés au 13^{me} Régiment de Dragons, après la libération de la France. Une belle preuve d'une conception réussie.

■ Caractéristiques du SOMUA S35

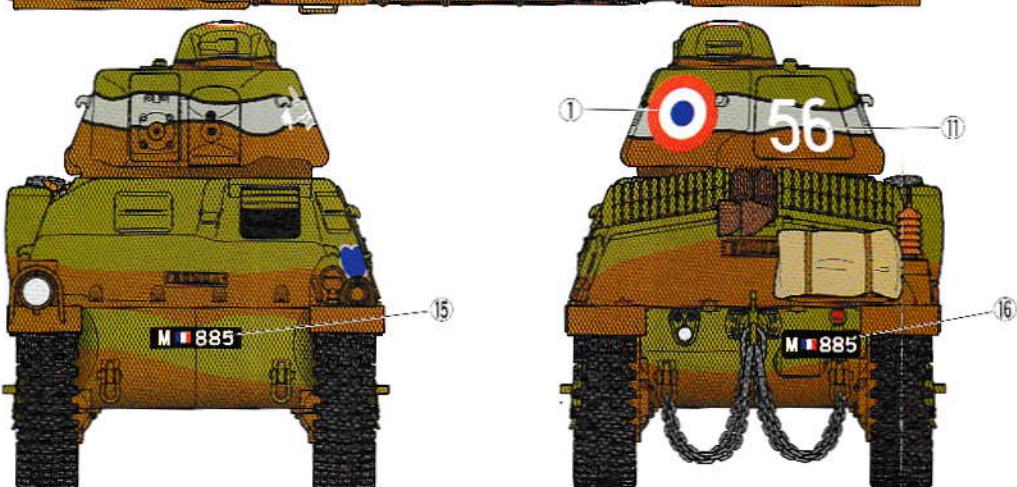
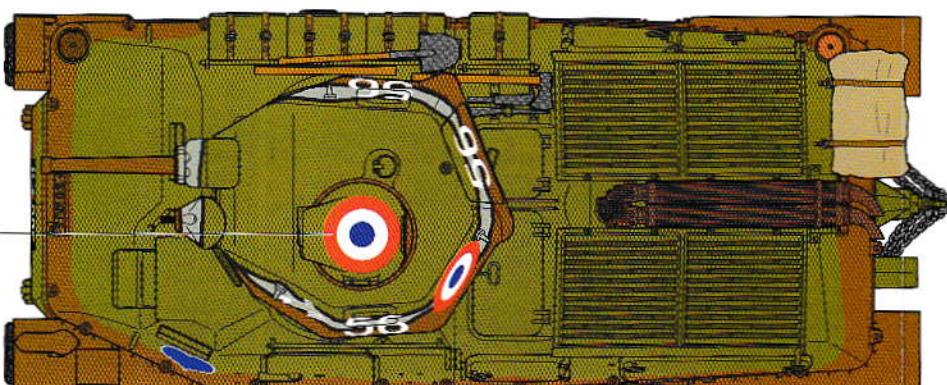
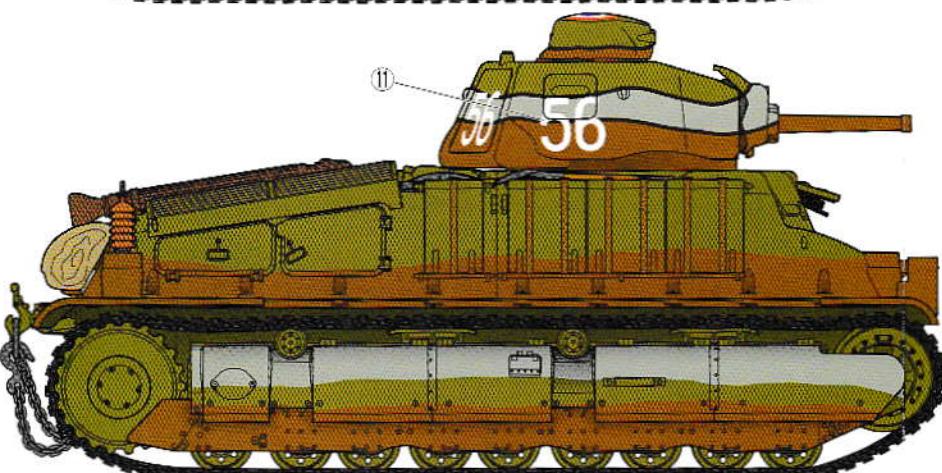
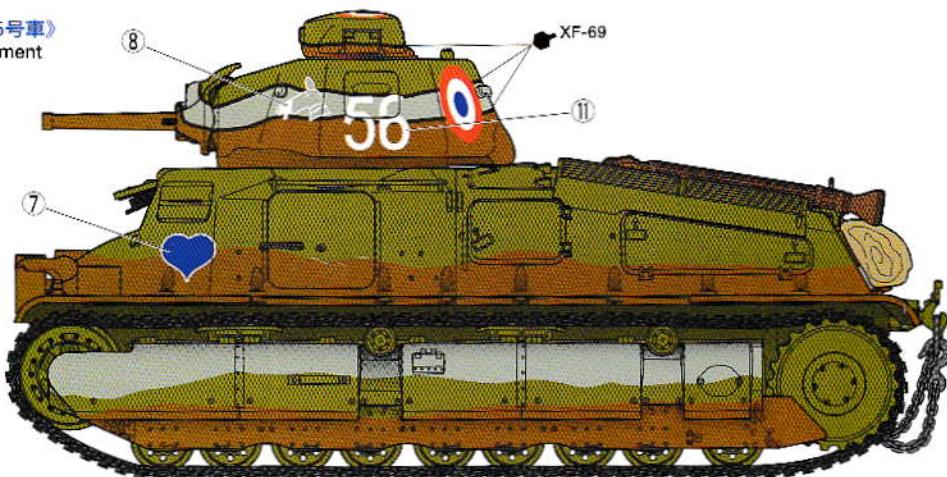
- Longueur: 5,380mm ● Largeur: 2,120mm ● Hauteur: 2,624mm
- Poids en ordre de combat: 19,5 tonnes ● Equipage: 3
- Moteur: SOMUA V8 à essence refroidi par liquide
- Puissance maxi: 190cv (à 2.000 trs/min.)
- Vitesse maxi: 40,7km/h ● Autonomie: 230km (sur route)
- Armement: canon anti-char SA35 de 47mm x1 (120 obus), mitrailleuse Reibel 7.5mm x1
- Blindage de caisse: 40mm (avant, côtés), 15mm (plaques horizontales sup. et inf.)

A 《第18竜騎兵連隊所属 5号車》
No.56, 18th Dragoon Regiment

TS-1
(XF-64)
レッドブラウン
Red brown

XF-58
オリーブグリーン
Olive green

XF-21
スカイ
Sky



B 《第13竜騎兵連隊所属 42号車》
No.42, 13th Dragoon Regiment



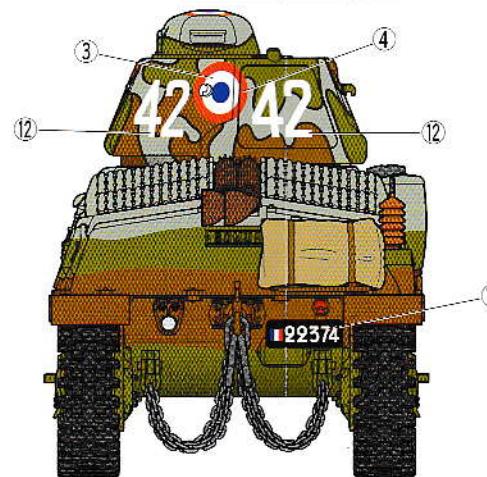
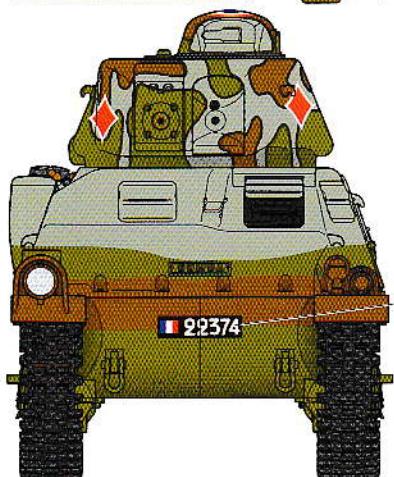
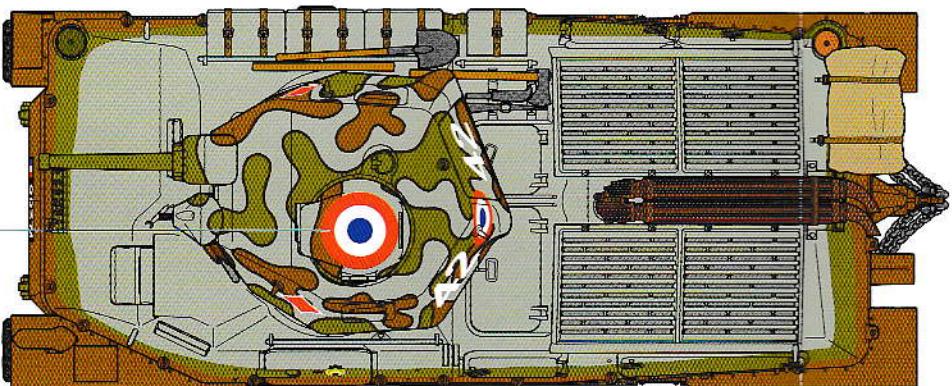
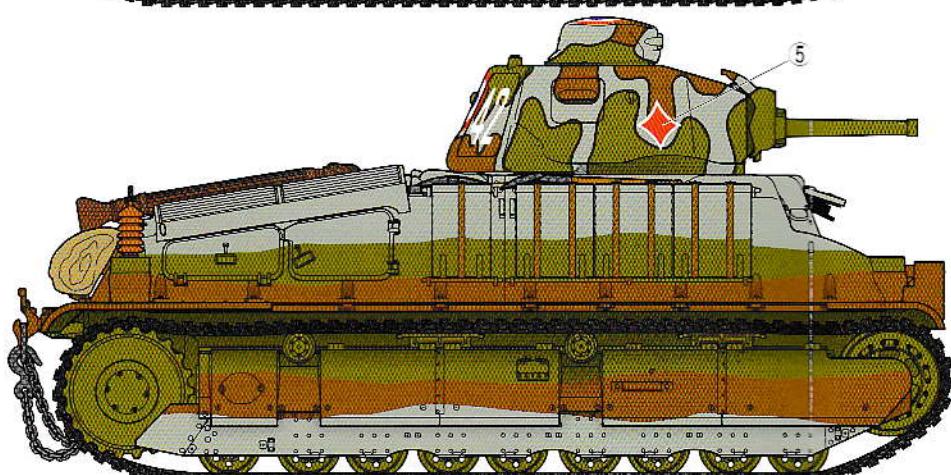
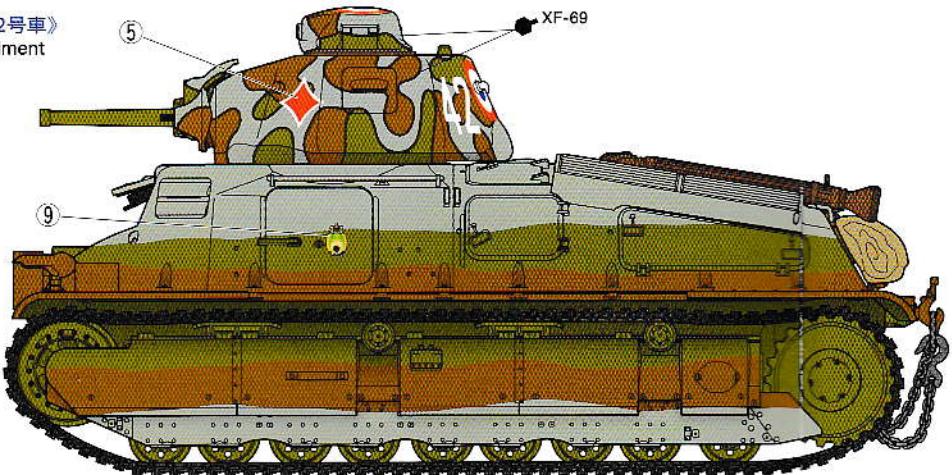
TS-1
(XF-64)
レッドブラウン
Red brown



XF-58
オリーブグリーン
Olive green



XF-21
スカイ
Sky



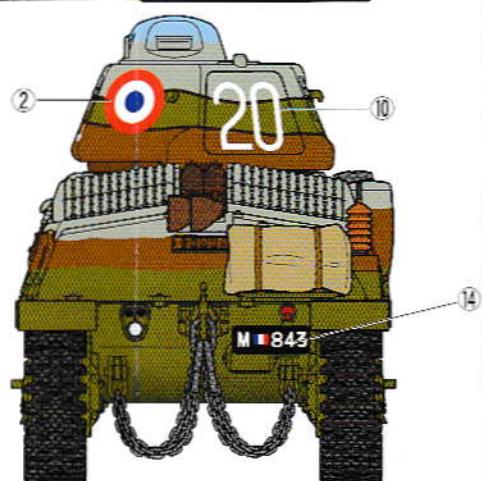
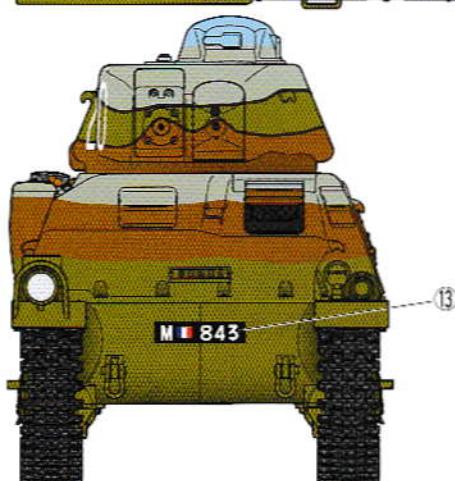
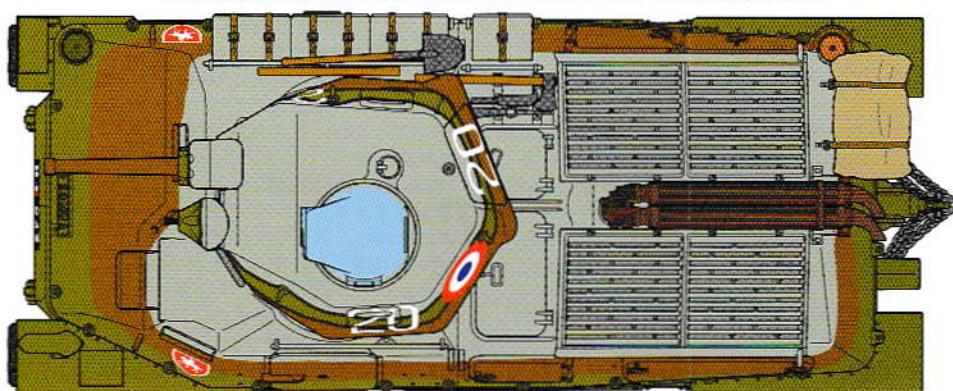
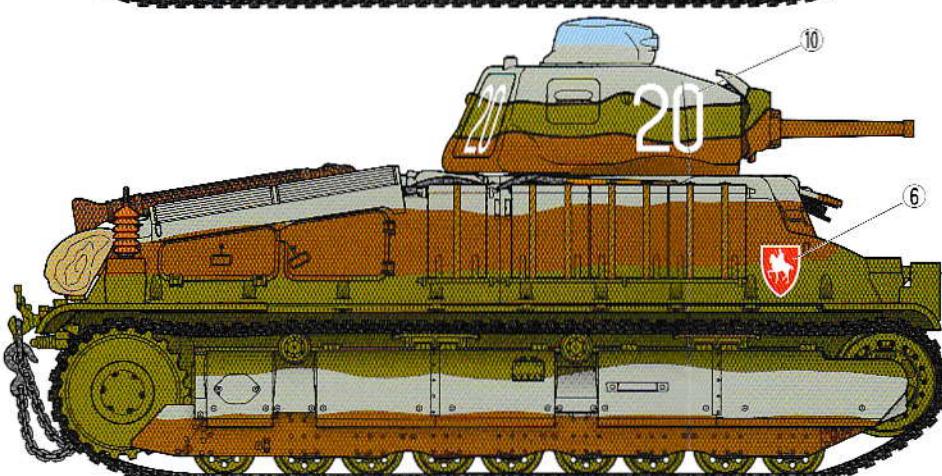
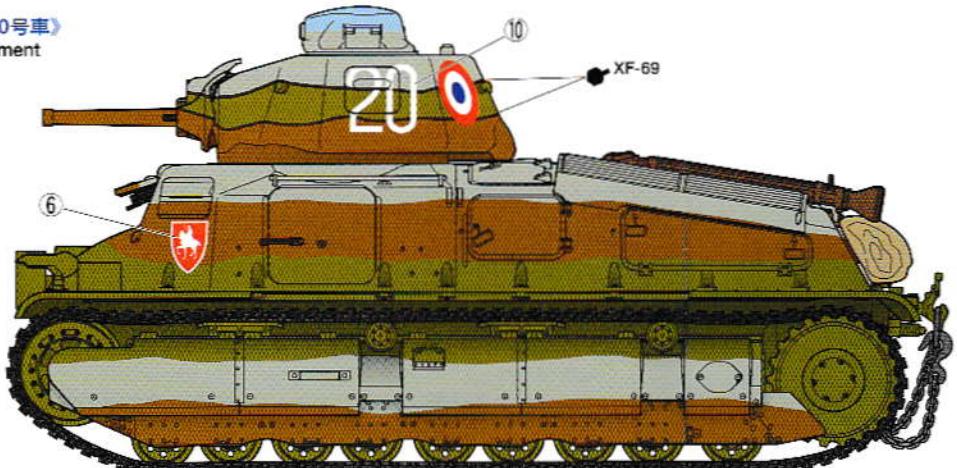
C 《第4胸甲騎兵連隊所属 20号車》
No.20, 4th Cuirassier Regiment

TS-1
(XF-64)
レッドブラウン
Red brown

XF-58
オリーブグリーン
Olive green

XF-21
スカイ
Sky

XF-23
ライトブルー
Light blue



PAINTING

《ソミュア S35の塗装》

1936年頃から1940年まで生産されたソミュアS35には、様々な迷彩が施されていました。明るいグレイ、グリーン、ブラウンの帯状迷彩で、境界が黒色のラインで縁取られたものなどが見られますが、砲塔と車体の迷彩パターンが異なっている場合もありました。これは砲塔と車体が別のメーカーで生産され、工場出荷時に迷彩が施されたためのようです。またハートやダイヤなどのマークは所属小隊、マークの色は所属中隊を表します。装備品など細部の塗装は組み立て図中にタミヤカラーの色番号で指示してあります。

Painting the SOMUA S35

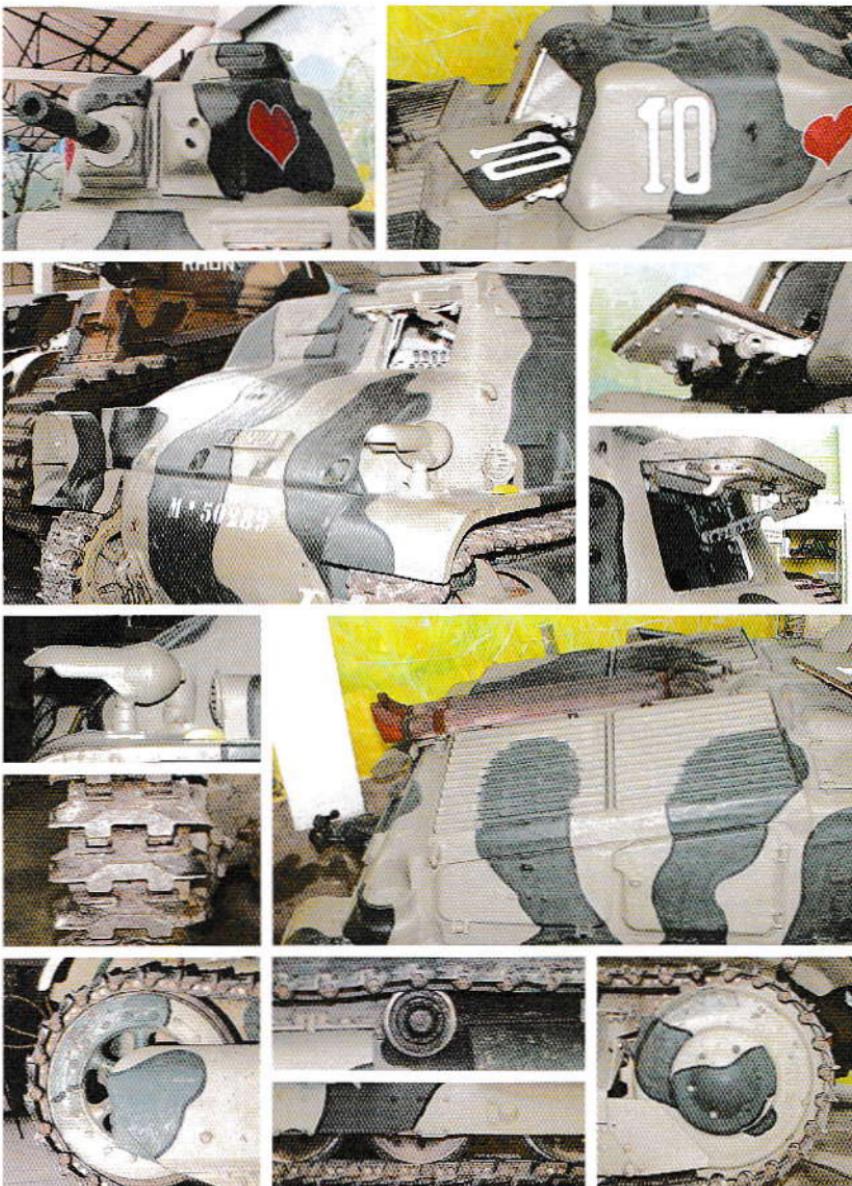
The SOMUA S35 was manufactured from 1936 to 1940, and had various camouflage schemes applied. One scheme featured Light Gray, Green and Brown bands with Black borders. On some tanks, the pattern on the turret and hull did not match owing to the two components being produced and painted by different manufacturers. Playing card aces were painted to differentiate between individual platoons, their color representing their company. Painting instructions for details are indicated during assembly.

Bemalung des SOMUA S35

Der SOMUA S35 wurde von 1936-1940 gebaut und hatte verschiedene Tarnmuster. Eines davon hatte hellgrau, grün und braune Bänder mit schwarzen Rändern. An einigen Panzern passte das Schema an Turm und Wanne nicht zusammen, was daran liegt, dass die Baugruppen in unterschiedlichen Firmen gebaut wurden. Spielkarten-Symbole waren aufgemalt um die Züge zu unterscheiden, wobei die Farbe die Kompanie anzeigen. Bemalungshinweise für Details sind während des Zusammenbaus im Handbuch angegeben.

Peinture du SOMUA S35

Les SOMUA S35 furent produits de 1936 à 1940 et ils reçurent divers schémas de camouflage. L'un d'entre eux était constitué de bandes gris clair, vertes et brunes avec des délimitations noires. Sur certains tanks, les camouflages de la tourelle et de la caisse ne correspondaient pas, ces deux éléments étant produits par des constructeurs différents. Des as de jeu de cartes étaient peints pour identifier les pelotons, la couleur représentant la compagnie. Les instructions de peinture des détails sont fournies durant l'assemblage.



取材協力：ソミュール戦車博物館 / Photo is courtesy of the MUSÉE des BLINDÉS de SAUMUR